片倉佳史の台湾歴史紀行　第四回

高雄　(4)―美濃と高雄市山岳部を訪ねる

片倉　佳史（台湾在住作家）

台湾南部最大の都市として君臨する高雄市。世界でも屈指の規模を誇る港湾都市であり、産業都市としても名を馳せている。2010 年 12 月に旧高雄県と合併を果たし、現在は台南市と合わせると、台北に匹敵する規模の都市圏を形成している。今回は高雄市郊外の美濃地区と同市の山岳地帯に見られる蝶の生態について紹介したい。

美濃

メイノン　台湾華語(國語・北京語)
びーのん　台湾語（ホーロー語）
みーぬん　客家語
みのう（日本統治時代の読み方）

高雄郊外に広がる農業地帯

今回は高雄市美濃区を紹介したい。緑豊かな農業地帯として知られ、最近はその素朴な風情を求めて行楽客が増えている。景観のみならず、客家住民の暮らしぶりや、文化に触れることもできる土地だ。

美濃（みのう）はかつて「瀰濃」と呼ばれた土地である。開拓が始まったのは清国統治時代の 1736 年頃というのが定説で、高樹（たかぎ）方面から客家系住民が入植し、切り拓かれたという記録が残る。

一帯には広大な平野が広がっている。古くはさとうきびの栽培などが行なわれていたが、日本統治時代に灌漑用水路が整備されてからは稲作が盛んになり、同時に、タバコや野菜などの栽培が奨励された。現在はこれに加え、果実栽培や花卉をはじめとする園芸農業も盛んになっている。いずれも換金性の高い商品作物で、比較的裕福な農家が多いことでも知られている。

なお、現在の「美濃」という表記になったのは 1920（大正 9 ）年の地名改正からである。

写真 1　質実剛健の気質で知られる客家の人々。季節を問わず、美しい田園地帯を眺めることができる。

写真 2　豊かな田園地帯が広がる農業地帯。美濃は園芸農業も盛んな土地である。

写真 3　老建築も多く残っている。こういった家屋群も美濃を特色づけるものとなっている。

美濃で客家（はっか）の文化に触れる

美濃（みのう）は客家（はっか）住民が数多く暮らす都市である。旗山とはわずか５キロほどの距離だが、福建省を出身地とするホーロー（河洛）人が多い旗山（きざん）に対し、こちらは圧倒的多数を客家人が占めている。両者の文化的相違は小さくない。特に美濃の場合、客家人が占める割合が９割にも達しており、客家の伝統文化や風俗習慣が色濃く残っている。

客家人は中国大陸南部から台湾に渡ってきたエスニックグループ（族群）である。台湾北部では桃園市や新竹（しんちく）県、苗栗（びょうりつ）県に多く暮らしており、南部では美濃のほか、屏東（へいとう）県の萬巒（ばんらん）や竹田（たけだ）が代表的な町として挙げられる。

言語については、美濃の客家人は広東省梅縣の出身者が多く、「四縣」と呼ばれる客家語を話す。これは苗栗県内に暮らす客家人の言葉と同じものとされるが、一部、語彙や表現に差異が見られる。なお、美濃は客家人の比率が高いこともあり、住民の大半が世代を問わず、客家語を常用する。台湾でも社会の変化により、地域言語や部族言語が急速に衰退しているが、ここはそんな中、希有な事例となっている。

客家人の集落は山岳部と沿岸部の間に位置することが多い。これは台湾北部でも同様で、山岳部には原住民族、沿岸部にはホーロー人、その間に客家人が暮らすという住み分けがはっきり見える。

これは客家人が台湾の人口の大半を占めるホーロー人よりも遅れて移入したことに起因する。先住のホーロー人がいる沿岸部には住めず、山岳部では縄張りの意識が強い原住民族の人々と葛藤が生じる。そのため、山麓部に暮らすことを強いられたのである。

そういった背景を受けて客家人は集落を形成していくが、彼らの暮らす土地は扇状地が多く、水を得にくいため、生活は貧しかった。ここに質素倹約を美徳とする気質が培われるようになった。

同時に、客家人は学問や教育を重視し、勤勉であることでも知られる。実際に、美濃は大学院への進学率がとても高く、台湾で最も多くの「博士」を輩出する町として知られている。

勉学を重んじる気質は町の入口に残る「敬字亭」からもうかがえる。これは文字が書かれた紙を燃やすために設けられた焼却炉のこと。かつて紙は貴重な物資であり、かつ学問に触れる機会も限られていた。そのため、客家の人々は紙を神聖視し、焼却の際にはここで手を合わせてから処分したという。現在は使用されていないものの、美濃には４つの敬字亭が残っている。

さらに、客家の人々は信仰心に篤い。一族の繋がりも強く、多くの家庭に「伯公壇」と呼ばれる

写真４　美濃一帯には花畑が広がっている。花卉栽培はここ数年で急成長を遂げている。

写真５　町外れには日本統治時代に建てられたタバコの乾燥小屋も残っている。

祭壇がある。これは風雨を司る土地公に似たもので、これを崇めることで安定した暮らしと家族の繁栄を願う。現在、美濃全体では370座以上の伯公壇があると言われ、美濃の特色となっている。

美濃を散策する

2015年末にオープンした「美濃文創中心」は、郷土文化を深く掘り下げ、同時に外に向かって発信していく基地として整備されたものである。

ここは日本統治時代に置かれた警察官吏派出所で、設置は1902（明治35）年とされている。現在の建物は1933（昭和8）年に竣工したもので、耐震構造が施され、外壁にはタイルが貼られている。昭和初期によく見られたデザインの警察建築である。

ここは2007年に古蹟として指定を受け、保存対象となった。しかし、長らく遺棄されていたため、修復工事は大がかりなものとなった。日本統治時代は警察官が暮らす官舎なども設けられていたため、当時から敷地は広かったという。戦後、中華民国政府に接収されると、これらは撤去され、その場所に新しい庁舎が建てられた。そのため、日本統治時代の建物は新庁舎の裏手に隠れてしまい、道路からは見えない状態となっていた。

訪れてみると、広い前庭があり、その奥に建物はある。敷地内にある老木はかつて官舎の庭にあったものだという。館内は地場産品の展示や旅行者向けの案内業務、そして郷土文化の紹介といった地域文化の発信基地となっている。

美濃文創中心の前を走る永安路は古い家並みが残っており、散策が楽しいエリアである。観光スポットと呼べるようなものはないが、歴史建築が醸し出す独特な雰囲気にはぜひとも触れてみたい。

美濃文創中心を背にして左手に進んだ先には東門楼がある。ここは美濃のシンボルとされる存在で、建造は清国統治時代の1755年に遡る。当時は戦乱が絶えなかった時代で、集落は周囲に柵を設けていた。現在も姿を留めるのはここだけとなっている。

写真6　美濃文創中心は日本統治時代の警察署を整備したもの。美濃の歴史について学ぶことができる。

写真7　改修を経た東門楼。正面上部には「大啓文明」という文字が掲げられている。

1895（明治28）年に日本統治時代が始まると、日本軍との戦闘で破壊されたが、その後に再建された。さらに1950年にも大がかりな修復が行なわれた。現在は古蹟の指定を受けており、2014年に改修工事を経て現在の姿となった。

なお、美濃のバスターミナル付近にはレンタサイクルのショップなどもあるので、これを利用すると活動範囲が広がる。

素朴な味わいの客家料理を味わう

美濃を訪ねた際には客家料理を味わってみたい。客家料理そのものは台北や高雄といった都市でも味わうことは可能だが、客家住民が多い土地で味わうと、味わいも異なってくる。美濃には福

菜や野蓮菜といったご当地野菜と呼ぶべきものもあるので、見逃したくないところだ。

客家料理の特色は食材に肉類を多く用い、香辛料やラードを多用すること。そして、濃い味付けが多く、ご飯が進みやすいこと。さらに、塩漬けや薫製など、保存に長けた料理が多いことが挙げられる。

また、客家料理は「鹹（塩辛い）」、「香（濃いめの味付け）」、「肥（油っぽい）」の三要素が重視される。煮込み料理と炒め物が多い。特に大鍋でじっくりと煮込んだ料理に逸品が多い。

いくつかの代表料理を挙げてみると、酸味の利いた「薑絲大腸（千切りにした生薑とホルモンの炒めもの）」やこってりとした風味の「梅干扣肉（高菜と豚肉の煮込みもの）」が定番とされるほか、客家風五目炒めと言うべき「客家小炒」もよく知られている。また、薬草やハーブを用いた料理も多く、台湾デザートとして定着している仙草を煮出して鶏肉を煮込む「仙草鶏」が知られている。

南部の客家集落では醤油風味でトウガン（冬瓜）やキャベツを煮込んだ「冬瓜封」や「高麗菜封」などをよく見かけるが、これは新竹や苗栗といった北部地域ではあまり見かけない。これもまた、一種の郷土の味覚と言えるだろう。

また、米を用いた料理が多いのも特色と言えるだろう。これは客家全体に共通するものだが、穀倉地帯だけあって、美濃ではそれが顕著である。特に「粄條」と呼ばれる麺は美濃を代表する郷土料理でもあり、市内のいたるところに粄條を供する食堂を見かける。

なお、客家料理は家庭料理が発展したものであり、大人数で食べるのが基本となる。日々の暮らしの中で培われた美味しさをぜひとも味わってみよう。質素倹約を美徳とする気質の現われか、見た目の華やかさはないが、しっかりと手間をかけ、味付けを重ねていった料理の数々。あれこれ試してみる価値は十分にあると言えそうだ。

写真８　ぜひとも味わってみたい客家料理。素朴な味わいで日本人の口にも合う。

写真９　台湾南部では醤油でトウガン（冬瓜）をじっくり煮込んだ「冬瓜封」などが知られる。

野蓮菜～美濃のご当地野菜を味わう

台湾の南部、特に美濃だけに生える野蓮菜（水蓮菜）の栽培地も見られる。これは和名を「タイワンカガブタ」という浮葉植物で、葉と茎を繋ぐ葉柄の部分を食する。本来は「台湾鏡蓋」と記されていたが、これが転訛して「カガブタ」となった。

カガブタは日本でも見られる植物だが、その数は多くない。また、欧米では水草として親しまれている植物である。いずれも食材として用いることはなく、食用するのは台湾だけと思われる。

カガブタは沼地に生えており、台湾でも北部では見られず、南部のこの地域に特有の野菜となっている。葉柄は１メートルを超え、栽培地も沼の

ように見える。最近はため池のようなものを作り、そこで栽培されることも増えている。収穫時にはダイバースーツに身を包んだ人々が胸まで水に浸かり、両手に絡めるようにして採っていく。

長らくこの地に特有の野菜となってきたタイワンカガブタだが、最近は輸送手段の多様化と発展により、台北などでも味わえるようになっている。豚肉と炒めて食すことが多いが、シャキシャキとした食感は他の野菜には見られないものがある。ぜひとも味わってみたい。

なお、タイワンカガブタの栽培地は美濃湖と呼ばれる湖沼の近辺に広がっている。美濃湖は日本統治時代に整備された人造湖で、もともとは清国統治時代の 1748 年に灌漑を目的に設けられた貯水池を拡大したものである。

この湖は戦後、蒋介石にちなんで「中正湖」と名付けられた。中正とは蒋介石の本名で、台湾各地でこの名の付いた地名が見られたが、時代の変遷を受け、改められるケースが多い。ここの場合も住民の請願運動を受け、2016 年 8 月 22 日に美濃湖の名に変更となった。風光明媚なだけでなく、野鳥の観察ポイントとしても知られている。

写真 10　カガブタの収穫風景。美濃一帯にのみ生えるご当地野菜である。水蓮菜と呼ばれることも多い。

写真 11　当地の特産品として名を馳せている。シャキシャキとした食感が独特な野菜である。

写真 12　美濃湖は景勝地としても親しまれ、周囲にはサイクリングロードが整備されている。

写真 13　フルーツ栽培も盛んだ。全体を布で覆い雑菌や虫を排除しながら栽培されるパパイヤの様子。

写真 14　ようやく日本への輸出が解禁となった「蜜棗」。リンゴにも似た食感と爽やかな香りが人気を呼びそうだ。

胡蝶が舞う黄蝶翠谷を訪ねる

美濃の郊外に雙渓と呼ばれる川が流れており、小さな渓谷を形成している。ここは「蝶の谷」と呼ばれ、蝶好きたちに親しまれている。現地では「黄蝶翠谷」と呼ばれており、春から夏にかけて、黄色い蝶が谷間に大発生する。

台湾は世界的に知られた蝶の王国であり、日本からも多くの愛好家たちが訪れている。台北郊外では烏來（ウライ）、中部では埔里（ほり）、南部では墾丁（こんてい）国家公園など、いくつもの名所が存在するが、いずれも大型の蝶がメインとなる。そんな中、小型種のキチョウ（黄蝶）ばかりが集中して発生するこの場所は異色の存在となっている。

キチョウはシロチョウ（白蝶）科に属し、ごく普通に見られる種類とされる。実際にはこのほかにもタイワンキチョウ（台湾黄蝶）をはじめ、ウスキシロチョウ（薄黄白蝶）やウラナミシロチョウ（裏波白蝶）、東南アジア原産とされるエサキキチョウ（江崎黄蝶）、ウスイロキチョウ（薄色黄蝶）などが見られる。ちなみに、タイワンキチョウは日本でも見られるが、棲息するのは八重山諸島のみとなっている。

この独特な生態景観は日本と深い関わりがある。戦時中、台湾総督府は台湾南部において、熱帯植物の植林を奨励した。時にマラリアの特効薬とされるキニーネを得るべく、大規模な植林を行なったが、この地も例外ではなく、枕木などの木材需要を満たすため、大量のタガヤサン（鉄刀木）が植樹された。

これがタイワンキチョウの生育に適したため、大規模な繁殖に結びついた。もともとは毎年6月前後に大発生していたといい、1988年には5千万を超える蝶が集結したという驚異的な記録も残っている。現在は生態環境や気候の変化もあって、そこまでの数には到っていないが、世界に名だたる存在であることは確かと言えるだろう。

最近は開発などにもよってタガヤサンの樹が減っていることも大きく影を落としている。1992年にはここにダムを建設する計画が立てられ、一度は蝶の谷も消滅の危機に晒された。しかし、住民から反対の声が上がり、請願運動によって救われた。一連の運動は戒厳令が解除されて間もない時代に行なわれたこともあり、台湾の社会運動史の中でも注目されている。

現在、黄蝶翠谷では生態環境の保護と樹林の保育が進められている。数は減り、空を埋め尽くすような光景は過去の物となったが、谷間に無数の蝶が飛び交うシーンは鮮烈な印象を受ける。機会があれば、黄色い蝶たちが集団で吸水する様子をぜひとも目にしてほしい。

写真15　黄色い蝶が無数に舞う黄蝶翠谷。蝶は年に数回大発生する。特に春先から初夏までの時期が狙い目となる。

竹子門水力発電所～南部で最初の発電所

台湾の中央部には高峻な山々が連なっており、降雨量も多いため、無数の河川が形成されている。季節によって差はあるものの、いずれも水勢が強いため、数多くの水力発電所が設けられた。

美濃の郊外にある竹子門発電所は台湾南部に設けられた最初の発電所である。正式名称は「高屏發電廠竹門機組」。地元では竹子門発電廠と呼ば

れることが多い。

台湾総督府が台湾で最初に設けた発電所は1905（明治38）年竣工の亀山水力発電所で、これは台北の郊外に設けられた。その後、各地に発電所を設けていったが、1909（明治42）年10月27日、台湾南部最初の発電所として、ここが設けられた。取水後、地下トンネルによって導水し、落差21・3メートルを用いて発電を行なうというものだった。翌年から電力供給が始められ、台南、高雄、屏東など、広汎な地域に送電されている。

発電所に向かう道は細く、路地のような雰囲気である。まず見ておきたいのは水徳宮という廟である。ここはかつて神社があった場所である。神社の痕跡は残っていないが、1934（昭和9）年4月10日に獅子頭水利組合によって建てられた「岡田安久次郎君之碑」が境内に残っている。

その先には道路脇に石柱が確認できる。そこには「明治四十二年十二月廿七日」と刻まれている。小さなものだが、立派に存在感を示している。これは発電所の竣工を記念して建てられたものである。残念ながら、自動車事故で一部が破損しているが、一世紀という歴史を誇る石碑が健在なのは驚きに値しよう。

発電所の建物は日本統治時代のものが残されている。外観は戦前の発電所によく見られたスタイルで、無駄のない機能性重視の造りだが、外壁にはバロック風の装飾が施され、アクセントとなっている。

内部に設置されたタービンや送水管は戦前から受け継がれている。当時、台湾総督府は自前で機材を製作することができず、ドイツから購入した。1908（明治41）年、ドイツAEG社製の発電機が4台持ち込まれ、それぞれが毎時500キロワットの発電量を誇っていた。同じものが前述した亀山発電所などでも採用されたが、現存するのはここだけである。しかも、そのうち2台は現在も使用されている。

写真16　台湾南部最古の水力発電所。明治41年10月27日に落成した。現在は産業遺産として保存対象となっている。

写真17　日本統治時代に撮影された竹子門水力発電所の様子。拙著『古写真が語る台湾日本統治時代の50年』（祥伝社）より。

写真18　現在も稼働中の水力発電所。ここは台湾南部で最初の発電所だった。

守られてきた殉職碑

この発電所の構内に日本人技師の殉職碑が残されている。青柳義男、上利（あがり）良造、山中

三雄の三氏の石碑で、いずれも日本統治時代に電力開発に奉職した技師である。

青柳義男は1927（昭和２）年４月29日に病死した技師である。その後、工員の発起で追悼碑が建てられた。上利良造は1910（明治43）年４月９日、触電により殉職。1915（大正４）年３月23日に石碑が建てられた。そして、山中三雄は誤って水路に転落し殉職。1937（昭和12）年４月に碑が建てられたという記録が残る。

石碑の素材はそれぞれ異なっており、「技師青柳義男君之碑」は花崗岩で、「上利良造殉職之碑」は卵型の自然石、「山中三雄殉職之碑」はコンクリート製となっている。これらの石碑はいずれも工員たちによって建てられ、そして守られてきた。風化が進み、文字は読みにくくなっているものの、保存状態は良好だ。

戦後の国民党の独裁政権時代に行なわれた排日政策の下、この地においても日本にゆかりのものが撤去の憂き目に遭った。実際、叩き折られたと思われる痕跡も見られる。しかし、石碑は職員の手で手厚く守られ、現在も姿を留めている。

写真19　石碑にはそれぞれ解説板が設けられている。背後には南国情緒たっぷりの熱帯植物が生い茂っている。

余剰水は人々の暮らしと産業を支えてきた

この発電所で用いられた水は灌漑用水として再利用し、地域一帯を潤してきたことにも注目したい。

美濃の市街地のはずれに「獅子頭圳（ししとうしゅう）」という生活用水路が流れている。これは水力発電に使用された後の余剰水を流した水路で、農業に用いられるだけでなく、生活用水にもなって人々の暮らしを支えた。

市街地のはずれを流れる美濃渓には送水橋がある。これは獅子頭圳を流れる水を美濃渓の対岸に渡すもので、1928（昭和３）年に竣工している。

水管は幅１メートルほどだが、送水管の上に人道橋が設けられており、歩いて対岸へ渡ることができる。歩いてみるとただの橋のように思えてしまうが、少し離れたところから橋全体を見ると、下部に送水管らしきものが見える。

渡った先には「水橋改築紀念碑」という石碑が残っている。後方に回ってみると、

昭和拾二年十一月起工
昭和二年四月竣工
設計監督　技手　岡田安久次郎

と刻まれている。ただし、国民党政権時代に石碑の文字は傷つけられており、昭和とあったところは「民國」と上書きされた痕跡が見える。これは年号を改竄し、中華民国暦で記そうとした痕跡である。

台湾の河川は降雨時に集中して流水するため、渇水期は決まって水不足となる。日本統治時代、この一帯も水不足に悩まされていたが、発電所の余剰水を利用することによって、農業が大きく発展することとなった。美濃を訪れると、豊かな田園風景に誰もが魅せられてしまうものだが、こういった歴史的背景を知ると、印象も異なったものになるだろう。

写真 20　水路は今も利用されている。生活用水にもなっており、人々の暮らしにも密接な繋がりがある。

写真 21　獅子頭圳は今も昔も変わることなく、人々の暮らしを支えている。石碑は古蹟として扱われ、保存対象にもなっている。

神秘の蝶・ルリマダラ

高雄市の山間部では集団越冬する蝶の様子が見られる。これは世界でもメキシコと台湾にしかないというもので、注目を集めている。その蝶はルリマダラと呼ばれ、台湾では「紫斑蝶」と表記される。

ルリマダラが集団越冬するのは茂林国家風景区の管轄区域で、ここは雄大な景観のみならず、パイワン族やルカイ族の文化、多種多様な動植物など、魅力に満ちている。その中にルリマダラの生態景観も含まれる。

ルリマダラは昆虫網チョウ目タテハチョウ科マダラチョウ亜科ルリマダラ属に属する。羽を広げた時の大きさは 4 センチから 8 センチ程度で、春夏に台湾各地で繁殖する。都市部や郊外でも観察できる蝶だが、冬に台湾南部で集団越冬する習性はあまり知られていない。

ルリマダラの特徴は前羽の裏側が紫色になっていることで、光沢を帯びている。羽を動かしている際、羽上の鱗粉が太陽の光線を浴びて反射し、見る角度によって淡い紫色から鮮やかな紫色、そして深紫、さらに時には青く光る。その様子をルカイ族の人々は神聖なものとしてとらえ、崇めてきたという。

台湾にはルリマダラ 4 種が生息する。ツマムラサキマダラ、マルバネルリマダラ、ルリマダラ、ホリシャルリマダラである。かつての台湾にはルリマダラが 5 種いたとされるが、オオムラサキマダラは絶滅した。余談ながら、このオオムラサキマダラは台湾で最初に絶滅認定された蝶である。

ルリマダラは谷間を選んで集団越冬するため、その場所は「紫蝶幽谷」と称される。現在、台湾には越冬地が 31 箇所あり、大半は南向きの風を背にした地形となっている。また、清冽な水源と鬱蒼とした森林も重要な条件となっている。

台湾の場合、越冬する場所は高雄市山岳部と屏東県、台東県の低海抜山岳地帯となっている。中でも高雄市茂林区には 9 箇所が集まっている。いずれもチークや相思樹の多い自然樹林にある。

写真 22　美しい色合いを誇るルリマダラ。紫色の色合いは光線の角度によって変化する。越冬集団はチークや相思樹の樹林で行なわれる。写真提供・茂林国家風景区。

写真 23　ルリマダラの寿命は約 5 年と言われる。中央山脈の西側に沿って北上し、雲林県の林内から濁水渓を越え、苗栗方面に向かう。提供・茂林国家風景区。

「集団越冬」という神秘

集団越冬する蝶の様子が見られるのは世界で 2 箇所だけとされる。一つがメキシコのオオカバマダラ（大樺マダラ）で、もう一つが台湾のルリマダラである。オオカバマダラは「神秘の蝶」と呼ばれ、カナダやアメリカ合衆国北部から 4000 キロ以上飛来する。ただし、メキシコの山深い高海抜地で越冬し、越冬中は植物にぶら下がっているだけで、活動らしい活動はしない。

これに対し、台湾のルリマダラは海抜 500 メートル程度の山谷で越冬する。そして、雨が降っていなければ、ほぼ毎日、朝 9 時頃から夕方 5 時頃まで盛んに活動する。

山林に日が射し始めると活動を始め、午前中は日光浴や吸水などを行なう。吸水は葉上の露を吸うこと以外に、河原や水たまりに下りていく個体も少なくない。また、2 月頃にはマンゴーなどの花で吸蜜する個体も見られる。なお、天気の悪い日や夜間は樹木の影や葉の裏に止まり、時を過ごす。

ルリマダラは毎年 10 月中旬から南遷を始め、この一帯で冬を過ごす。そして、3 月から 4 月、具体的には清明節前後に北へ戻っていく。台湾の南北、その距離は 100 キロを軽く超える。

ルリマダラの観賞は 11 月頃から翌年 3 月頃までがシーズンとなる。移動のピーク時には毎分あたり 1 万頭のルリマダラが飛んでいくという。なお、より規模の大きい越冬地が屏東県春日郷にあるとも言われているが、山深い場所であり、調査は進んでいない。

写真 24　台湾では 4 種類のルリマダラが集団越冬をする。集団越冬という現象は地球上でメキシコと台湾だけで観測されている。提供・茂林国家風景区。

ルリマダラを取り巻く環境

環境破壊や地球の温暖化によってルリマダラの生態環境に変化が出ているのも事実である。

ルリマダラの集団越冬の最盛期は 1960 年代とされる。その頃は天を覆うほどのルリマダラの大群が見られたという。当時は総数で 200 万頭のルリマダラが見られたとも言われる。しかし、山林開発によって、茂林に飛来するルリマダラは激減した。現在は台湾全体で、多くても 60 万頭程度、茂林には 10～20 万頭程度と推測されている。かつては茂林だけで 100 万頭の蝶がいたことを考えると、その激変ぶりに驚かされる。

ここ数年は農地化や道路の建設など、さまざまな形で文明の脅威に晒されている。中でも、春先に越冬を終えたルリマダラたちが北に帰るルートがちょうど台湾の南北を結ぶ第二高速公路と交差していることは大きな悲劇を生んだ。

高速道路を走る自家用車によって気流が起こり、これに巻き込まれて蝶が大量死するという事態が引き起こされたのである。新聞報道によると、2004年に高速道路が全通して以来、ルリマダラの数は激減し、雲林県林内付近では移動するルリマダラが約5万頭しか確認できない年もあったという。

こうした事態を受け、生態保護を訴える団体や市民が運動を起こした。その結果、2007年には道路に防護網が設置され、蝶の集団が無理なく道路を飛び越せるようになった。さらに、毎年3月初旬から4月下旬まで、第二高速公路3号線の251・9キロ地点で、毎分あたりの蝶の個体数に応じて、外側車線約500メートルを封鎖し、蝶の集団を優先的に通過させるという措置が実施された。蝶の通行経路を守るために道路を封鎖するというのは世界でも珍しく、注目を集めた。

また、2009年夏に台湾南部を襲った「八八水害」でも大きな影響が出ている。この時は茂林区でも土砂崩れなど、甚大な被害が出た。その後の大がかりな復旧工事でルリマダラが寄り付かなくなり、その年の蝶の数は最低を記録したという。一方で、災害によって封鎖された地域は、人が入らなくなったことで、かえって生態が守られ、ルリマダラが爆発的に増えたという皮肉な結果も残っている。

さらに、温暖化現象も大きな影響を与えている。温暖化によって開花時期がずれたりするため、ルリマダラが蜜を得られなくなったり、水不足によって吸水行動ができなくなるなど、さまざまな形で影響が見られる。また、越冬には蜜のある植物が必要で、最近はマンゴーの花が北へ帰る準備をするルリマダラにとって重要な存在となっている。しかし、これもまた、栽培過程で用いられる農薬がルリマダラの生命を脅かす。

写真25　ルリマダラの生態環境を守る動きも盛んだ。茂林国家風景区が設けた標識。2009年撮影。

写真26　雲林県林内ではルリマダラの飛行経路を守るため、一時的に道路を封鎖する。

写真27　世界に誇るべきルリマダラの生態を守るだけでなく、関心を高める努力も熱心に行なわれている。

こういった状況の中、茂林国家風景区をはじめ、各機関が協力体制を用いてルリマダラの生態環境を守ろうとしている。最近は社会的関心も高まっ

ており、台湾が誇るべき自然の神秘を守っていこうとする動きが活発化している。

機会があれば、ぜひともその姿に触れてみたいところである。

片倉佳史　（かたくら よしふみ）
1969年生まれ。早稲田大学教育学部卒業。台湾に残る日本統治時代の遺構を探し歩き、記録している。これまでに手がけた台湾のガイドブックはのべ35冊を数える。そのほか、地理・歴史、原住民族の風俗・文化、グルメなどのジャンルで執筆と撮影を続けるほか、台湾の社会事情や旅行情報などをテーマに講演活動を行なっている。著書に『台湾に生きている日本』（祥伝社）、『旅の指さし会話帳・台湾』（情報センター出版局）、『台湾に残る日本鉄道遺産』（交通新聞社）など。2012年には李登輝元総統の著作『日台の「心と心の絆」～素晴らしき日本人へ』（宝島社）を手がける。最新刊は台北生活情報誌『悠遊台湾』。『台湾で日帰り旅　鉄道に乗って人気の街へ』（JTBパブリッシング）を近刊予定。
ウェブサイト台湾特捜百貨店　http://katakura.net/